

コラム：吉田公平先生

(東洋大学名誉教授)

西晋一郎と中江藤樹



西晋一郎（一八七三・明治六年—一九四二年—昭和十八年）は、哲学者として、生前は西田幾多

郎と並び称された巨人であった。その有様は、門人知友が、西晋一郎の人と学問を語った『清風録』『續清風録』を見れば一目瞭然である。しかし、西田幾多郎の哲学と人となりについては、その著書は『西田幾多郎全集』として刊行を重ね、その哲学についても評伝についても、夥しい数が刊行されているのに対して、西晋一郎については、その著作が全集として刊行されることは、全く無かった。評伝・哲学について略述した縄田二郎先生の『西晋一郎先生の生涯と哲学』（理想社。昭和二八年）が唯一であった。縄田二郎先生は西晋一郎の晩年の弟子である。小生が広島大学に赴任したおり、広島大学の気風に少しく狎れた頃に、先生のお宅に伺った。近くののでいつでもお会いできると暢気に構えていた。小生は先生にお会いすることはでき

なかった。ご遺族の皆さんにお会いして、西晋一郎先生に関心があることを告げると、縄田先生は、旧著を改訂増補した原稿を書き上げておられるとのこと。小生はその原稿のままにしておくのは勿体ない旨を述べ、小生が活字に起こして出版することを許して頂いた。それが、『西晋一郎の生涯と思想』（五曜書房。二〇〇三年）である。小生が「序にかえて」を執筆した所以である。活字起こしをしながら多くのことを学ぶことができた。

西晋一郎の哲学に関する研究は限元忠敬著『西晋一郎の哲学』（平成七年。溪水社）が唯一か。最近、山内廣隆著『昭和天皇をポツダム宣言受諾に導いた哲学者西晋一郎、昭和一八年の御進講とその周辺』（ナカニシヤ出版。二〇一七年）、衛藤吉則著『西晋一郎の思想—広島から「平和・和解」を問う』（広島大学出版会。二〇一八年）がある。

西晋一郎は哲学者として研究されるよりは、西晋一郎の箴言・処世訓が熱心に読まれている。森信三、木南卓一、松下幸之助、稲盛和夫が心酔者によって熱心に読まれるのと同案である。

西晋一郎の業績は三部門に分かれる。第一は西歐哲学。第二は国学・

国体論。第三は中江藤樹である。西歐哲学に関する西晋一郎の理解と評価については小生は門外漢なので講評する資格が無い。第二の国学・国体論については、資料整理が未完なので今は発言を控えたい。第三の中江藤樹については、小生は中国の王陽明・陽明学を学んできたので、その視点から、少しく考えるところを述べることにしたい。

とはいうものの、西晋一郎の本領は實は第二の国学・国体論にあった。国学・国体論が国策として最も喧しく論じられたのは昭和前半期であった。文部省数学局が『国体の本義』『臣民の道』を編纂し、その趣旨に沿う出版物を洪水の如く出版して、怒濤の如く宣伝した。この風潮のなかで、西晋一郎が力説した国体論・国学はこの流れを先取りしたものとして時運の寵児であった。この論理の中で、中江藤樹はこのほか高く評価された。『大日本帝国憲法』では天皇一人のみが主権を持ち、国民は臣下であった。西晋一郎は臣民の道德倫理を忠孝の二字に凝縮する。君（天皇）に忠に、親に孝にと。そして忠は孝を基盤にすると。道德倫理は孝に立脚することになる。それ故に西晋一郎は日本の学者の中では中江藤樹を最も高く評価したのである。

ひびきの声 上田 藤市郎

国際連合憲章は、国際の平和と安全の維持を目的として一九四五年六月に調印された。にもかかわらず、その加盟国であるロシアとウクライナの戦争は、国連憲章の精神を無視して続けられている。

国家の主導者によってひとたび戦争が始まると、これに抗って一部の国民が、反戦、非戦の行動を起こしたとしても容易に阻止できるものではない。

戦争遂行の世論は、国民の潜在意識に働きかける広告、テレビ、映画、ラジオなどに人が知覚できないような刺激で繰り返しメッセージを出し、好戦的に洗脳する。北朝鮮、中国、ロシア、台湾有事に備えて軍備の増強、軍事費の増額が話題にされ、戦争の不可避性をやむをえないことと訴えてくる。

自分の国を守るのは当然で、攻撃されないように軍備が必要で、攻撃される前に反撃する。そのためには相手の戦力以上の戦力を維持する。このように軍備が拡張される。ここには戦争回避の懇話が皆無である。しかし、戦いで決着するものは何もない。夥しい死者と破壊がもたらされるだけである。

私たちは、「これは平和のための戦争なのだ。」と言われても、きっぱり「戦争反対」と言えなければ自分も家族もこの国も守れないことになる。我が国にはその苦い体験があることを忘れてはならない。